

虚空中で

黒雀

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「私は強くならないといけないんです!」

とある事情でユクモ村に赴いた青年は一人の少女と出会う。

その少女はとてもあやふやで、いつか折れてしまいそうな程に脆そうに見えた。

そんな少女と青年は村長の呼び出しにより再び顔を合わせる事となる。その呼び出しの内容は青年が予想していたのとは全く違うもので――

「え、ええ。俺は別にいいですけど……」

――これは一人の青年と少女が出会うことで始まる物語。

目次

プロローグ	1
一話 戦闘 ～アオアシラ～	4
二話 ユクモ村にて	8
三話 メル	12
四話 条件と	16
五話 戦闘 ～ドスジャギイ～ 【前編】	20
六話 戦闘～ドスジャギイ～ 【中編】	25
七話 戦闘～ドスジャギイ～ 【後編】	28
八話 温泉にて	32
九話 旧友	36
十話 二人での狩猟	39

プロローグ

『じゃあなハナ。元気にやれよ』

『アキトくんこそ向こうでも頑張つてね』

——これはいつか交わした言葉。この自然豊かな村を離れる際に交わした言葉。

村に続く道を歩きながらあの頃の出来事を思い返す。

上位ハンターになり暫く経つたある時、ユクモ村に足を運んだ俺——アキトはそこで一人の女性ハンターと出会う。お互い今まであまり出会わなかった同年代のハンターという事で直ぐに意気投合し、親睦を深めていった。

俺がユクモ村に滞在した期間は二年。その二年は俺達にとっては五年……いや十年にも感じれるほど充実していた時間だったのかもしれない。

『スラッシュアックス、か。カッコイイね!』

『ハナは大剣か。見た目によらずパワフルだな』

狩りでは基本的に二人でクエストをこなしていた。二人とも前衛という事で危ない場面もあったが、今ではそれもいい思い出となっている。

『妹?』

『うんっ。可愛いんだよ〜』

時にはプライベートでのんびりと過ごしている日だってあった。お互いの事を話したり、昔俺が居たところを興味津々に聞いてきたりと夜通しで語り尽くした日もあった。

そして——。

『もう二年も経つたんだね』

『だな。……あつという間な感じだ』

『色々あったもんね。……ねえ。またここに来てくれる?』

『……来る、と思う。今よりもっと成長してここに帰ってきたい。それに——』

『それに?』

『——いや、なんでもない。そうだ、これ』

俺は整理していた荷物の中から一つの物を取り出した。輝く石に穴を開け紐を通し、装飾がしてあるお守り。それをハナに手渡す。

『? お守り?』

『プレゼントみたいなものだ。あんまり気にすんな』

つい照れ隠しに後ろを向いてしまう。ハナは俺の前に腰を低くし回り込みながらニヤニヤとからかってくる。

『へえ? アキトくん意外と可愛いところあるね』

『う、うるさい!』

最後の最後まで俺達は変わらなかった。ハナは俺が見えなくなるまで手を振って、大声で「またね」と言ってくれていた。

「(あれから五年も経ったんだな)」

このユクモ村に続く一本道を歩くとその時の記憶が鮮明に蘇る。

そう言えば、とハナと初めて会ったのはこちら辺だった事を思い出す。確か村付近まで降りてきていたモンスターを討伐していた、だったか。騒がしく音のする方へ向かってみるとそこにはアオアシラと交戦する女性の姿があった。それがハナとの出会いだった。

こうして荷車を運びながら目を閉じると当時の事が瞼の裏に――。

グルルルル……グルウアアアアアアアア!!!

「!」

大きな鳴き声が響き渡る。その声に木に止まり休んでいた鳥たちは飛び去り、危機を察したのか近くにいたガーグアは文字通り目を丸くして走り去っていく。

荷台を木陰に止め武器を取り出す。慣れた手つきでピンをセットし俺は鳴き声のした方へ静かに足を向けた。

木々の隙間をすり抜け一際広い場所へ出る。そこではあの時と同じような光景が目映った。

「——っ」

先程の鳴き声の主はアオアシラだったようだ。両手を上にあげ腕をクロスするように目の前を引っ掻く。それを間一髪で避けるハンター。

大剣を構えるが重さに負けているのか、それともまだ戦闘慣れしていないのかどこかフラフラとしている。ハンター本人には目立った外傷もない事からどちらかだと思うが……、どちらにせよ傍から見ただけでも危険に感じた。

そのハンターが避けた事によりアオアシラの攻撃は空振り、体勢が崩れた所を狙い俺は草木の隙間から駆け出し、武器であるディオスアックスを剣モードにして斬りつける。

「——大丈夫か？」

アオアシラが怯んだ隙にコンタクトを取る。

「え、あ……」

「(お、女の子……?)」

別に女が大剣を使うのは珍しくない、ただこの年齢の女の子がハンターをしているのに驚いた。その少女の茶色の髪、それに薄緑の瞳はある女性を連想させる。

——その出会いがある物語の始まり。

モンスターが生き、ハンターが狩る。常に生と死が背中合わせにある世界での物語。

一話 戦闘 くアオアシラく

「っ。構えろ、来るぞー！」

体勢を立て直したアオアシラはすかさずこちらへ距離を詰めるべく走ってくる。一直線の突進だけあって避ける事は簡単だ。

俺は横に回避し武器を構える。一つ一つの間隙が大きいアオアシラには、ヒットアンドアウェイを繰り返していけば危なげなく狩ることが可能だ。

「……………」

しかし少女は攻撃が目前に迫っているというのにその場から動かなかった。武器を地面に着くか着かないかの部分で構え、アオアシラから目を離すことなく見据えている。

俺が回避したことにより狙いが一点に絞られたアオアシラは、当然その一点目掛け駆ける。だが少女は動じることなくアオアシラを見据え続けた。

「(何を狙って…………)」

罨がある訳でもない、大剣でガードする気配もない。一体少女は何をしようとしているのか？

「グルウアアア!!!」

少女とアオアシラが接触する——その瞬間、少女が動いた。

「——ふっー！」

身体を少し捻り突進を受け流す。それと同時に少女は武器であるレッドウィングをがら空き同然の背中に振り回すように斬りつけた。リオレウスの素材で作られた大剣であるレッドウィングは、その素材の主であるリオレウス同様に火属性の力が込められている。

その斬撃により生まれた傷口はレッドウィングの炎で灼かれ、さらにダメージを与える。

「！・グルウウ……………」

確実な痛みが身体を襲っているのだろう、アオアシラは突進後に自分の違和感に気付いたようだった。

休む暇は与えない。そう言わんばかりに少女は抜刀状態のまま、背

中を向けているアオアシラに徐々に近付きレッドウィングを振り下ろした。

ズシン、と地面に刺さるレッドウィングは正にその威力を表しているように見えた。

「……凄いな」

思わず口から言葉が漏れる、それが正直な感想だった。あんな小さな身体でよくもそんな技術を使える、それに感心した。

逆にそれが俺の狩りを刺激するようになる。負けてられない、と謎の対抗心が生まれてしまう。

「(畳み掛ける——っ!)」

一気に離れていた距離を詰めるべく、俺はディオスアックス斜めに構え、剣先を地面に当てる。そしてそのまま引き摺るようにして力の限り走る。

「おおおおおおッ!」

「——!!!」

スイッチを入れディオスアックスに内蔵されている強撃ビンのエネルギーを刀身へと流し込む。淡く光る刀身を確認し、地面を抉るように真上へ斬り上げる。

斜め、左右へ切り返し、様々な攻撃を行いダメージを蓄積させる。

「(そろそろか)」

攻撃を重ねていくとチリ……、と肌にある感触が伝わってくる。

それを確認した俺は一瞬だけセットしたビンに視線を落とす。ビンの中身は半分空になっており、それをするには丁度いい頃合に見えた。

「君! 下がれ!」

「! は、はいっ!」

俺に合わせ攻撃を仕掛けようとしていた少女に下がるように指示を出す。少女が距離を取ったのを横目で確認して、俺は左右へと切り返ししながら斬りつけ、剣先をアオアシラに突き付けるようなポーズをする。そして——。

ザクッ——!

「ガア……ッ!!」

アオアシラの身体へとディオスアックスを突き刺し、傷口へ押し込む。激痛に咆哮を上げ、必死に藻掻くがそれを諸共せず、剣先を奥へ、奥へと抉らせる。

ビンに残ったエネルギーを全て刀身に流し込む勢いでスイッチを押し続け、剣先を突き刺す。徐々にディオスアックスは壊れるのではないか? という程に振動し始め、その振動は俺の腕を通し、身体全体へと伝わる。

振動が激しくなる度に刀身は光を増していき、アオアシラの傷口からは明らかに血ではない緑色の液体が漏れてきていた。

「——喰らいやがれ」

振動が頂点に達したのを感じ取ると同時に、アオアシラの身体が傷口を中心に爆発した。

「グオアアアアア!!! ア……アア……——」

爆発と共にアオアシラは叫び、倒れ込む。

俺はその爆風によってアオアシラから軽く吹き飛ばされる。

「す、すごい……」

熱くなったディオスアックスが剣モードから斧モードへと戻る。エネルギーの使い過ぎを防ぐために施された冷却システム、それが作動したのだ。

空になったビンを外しポーチへと入れる。そのまま武器を納刀し、俺は呆気にとられる少女の元へと歩く。

「あー……大丈夫だったか?」

「は、はい……。あの、助けてくれてありがとうございます」

少女も武器を納刀しこちらへゆっくりと歩いてきた。

「お節介にならなくてよかったよ。……ところで君は——ユクモ村の?」

「はい、私はユクモ村のハンターです。まだ未熟者ですが……」

「いや未熟だなんてそんな」

18……はいつてるのだろうか、それくらいの年齢の見た目での技術は凄いとしか言いようがない。自分の後輩なんてそれを聞いた

ら泣いてしまうのではないか……。

「いえ自分が一番自覚してますから。……えつと、そういうえばお兄さんはどうしてこんな所へ？ ユクモ村の方じゃないですよね？」

「あ、ああ。少し用事でね、ユクモ村に行く途中だったんだ」

「そうなんですか!?!」

グイ、と来られたじろぐ。

何か嬉しそうに、少女の表情が急に明るくなる。

「それなら急がないとですね！ それじゃあ——あ、自己紹介がまだでしたね」

そうだ。肩を並べ戦ったのに名前を覚えてなかった事をそこで思い出す。俺は咳払いをし、少女に名前を告げる。

「あー、それじゃあ。……俺は『アキト』ここからは少し離れた所から来た。よろしくな」

名乗り手を差し出す。それに続くように、少女は俺の手を取り名乗った。

「私はユクモ村のハンター『メル』です。先程はありがとうございます、それによりしくお願います！」

挨拶と共に握手を交わした俺達はユクモ村へと足を運んだのだ。た。

二話 ユクモ村にて

『最近はお客様が少なくて困ってるんですよ』

『そうなんだ？』

『はい……。何だかモンスター達の様子が変で、だから私が――』

『？』

『あつ、い、いえ！ 気にしないでください！ アキトさんには関係ないですから！』

『う、うん』

『えーと……。そ、それじゃあここでお別れですね。また機会があったら会いましょうね』

——というのがユクモ村に着くまでの俺とメルの話。最後は話をはぐらかされた気がしなくもないが、外部の者に込み入ってる話をしてはいけないのは当然か。

気を切りかえて、村の入り口を潜り中に入る。そこには五年前と変わらない、とても温かな雰囲気があった。

村の中央にある階段に沿いながら上へ登る。その時にすれ違う人々からは俺の事を覚えていて人がいるようで、数人から声を掛けられたりもした。

村の中心くらいまで登ると、端に足湯がありそこにはお爺さんが腰を下ろしゆっくりとしている。そしてその近く、椅子に座っている独特の雰囲気を持つ竜人族の女性の元へと俺は向かった。

「あらあら。お久しぶりですね」

「村長こそお久しぶりです。元氣そうで何よりです」

挨拶をし握手を交わす。昔と全く変わらない容姿、独特の雰囲気、その女性こそこのユクモ村の村長だ。

「それはアキトさんもですよ。一段と逞しくなられたようで……。ギルドを通して話は耳にしていますよ」

本当昔と変わらない人だな、なんて心の中で思いながら話す。久しぶりの再会を懐かしむのもいいが、俺はさっそく本題に入ることにする。

「あー、ところで村長。わざわざ俺を呼んだってことは何かあったんですか？ 詳しい内容が書かれてなかったんですけど……」

村長から届いた手紙を取り出しヒラヒラとする。その手紙を見た瞬間、少し表情が暗くなつた気がする。だけど村長は真剣な表情に切り替え、俺にある事を話し始めた。

「ええ、そうですね。……だけどその話をする前にある事をアキトさんには伝えないといけません」

「ある事？」

何だろうか、先程メルが言っていた事なのか、それとも別の――。

「ユクモ村の専属ハンターだったハナさんですが、二年前に亡くなりました」

「……………は？」

そのあまりにも唐突な言葉に思考が停止してしまう。

村長は今なんと言った？ ハナが亡^死くな^っただって？

「そんなまさか、一体誰に……」

動揺が隠せない。あいつがそんな簡単にやられるやつじゃないのは俺がよく知っている、俺が知ってるなら昔から知ってる村長なら尚更だ。

村長は目を伏せて、ゆっくりとハナを殺したというモンスターの名前を言う。

「ハナさんがやられたモンスターは……リオレウス希少種です」

「銀火竜……」

思わず零れてしまう。

――リオレウス希少種。

その名は銀色に輝く太陽、太陽の化身、それらを想像させる白銀の外殻を持つことから「銀火竜」という名で知られている。

俺は文献でしか目にしたことのない、伝説上の存在としか認知していない存在が実在することに衝撃を受けていた。そして、それにハナがやられたというのも……。

「すいませんアキトさん……」

村長が何故か謝る。俺はそれに対して何と答えればいいのか分からなかった。

何とも言えない空気が二人の間を流れる。明らかに周囲の雰囲気とは違う俺と村長は、無言のままそこにいた。

「……………」

「……………」

数秒の筈なのにとても長く感じるその時間は、意外にも直ぐに壊される事となる。それは先程聞いた声によるもので、その声の主は。

「そーんちよー！ー！！ アオアシラ討伐しましたよー！！」

「あら」

「ん？」

手を振りながらこちらにやってくるのは、案の定メルだった。服装は先程とは違い私服のようで、いかにも女の子らしい服装だった。

「あれ？ アキトさん？」

「メル？ どうして……」

ユクモ村の人間なんだからここに居るのは当然なのだが、何故わざわざここに来たのだろうか。

「……メルさんもタイミングよく来てくれたので、アキトさんには本題を話しましょうか」

その話し方からして村長は俺とメル、二人が居ないと話せないことを話すつもりなのか？ それもそれが俺を呼んだ事って。

村長は俺達を交互に見てから口を開いた。

「かのシルバーソルにハナさんがやられて以降、この村には専属のハンターがいなくなりました。村にハンターは居るものの数は多くはありません。それにハナさんのようなハンターも……。そこでアキトさんにはあるハンターの指導をして頂きたいのです」

要は指導係として俺は呼ばれた訳らしい。

「え、ええ。俺は別にいいですけど……。そのハンターっていうのは……………」

断る理由も今のところないので俺は話を了承し続けてもらう。

その返事を待っていた、と言わんばかりに村長は俺の横にいるメルの名前を呼んで……。

「——メルさん。アキトさんが貴女の先生です」

「アキトさんが……？」

そう告げたのだった。

三話　　メル

「どうぞアキトさん、ここが私のお家です」

「えっと、ここは……」

村長に促され二人で話すことになった俺とメルは、メルの家に向かうこととなった。……なったのだが、俺が来た場所はメルの家の手筈だ。だけど……。

「ハナの家、だよな……？」

あの頃と変わらない場所。家の中も家具の位置こそ変わってるものの、そこまで大きな変化はない。だからこそ分かる。

メルは俺の言葉に足を止める。

「やっぱり覚えてませんよね」

「え？」

「両手で数えるくらいしか話してませんから、当然といえば当然ですけど」

先程まで元気に話していた雰囲気は消え、真逆といえる物静かな雰囲気纏っていた。

あはは、と微笑しつつメルは改めて、俺に自己紹介をする。

「改めて自己紹介しますね。私はメル、この村のハンターだったお姉ちゃん——ハナの妹です」

「妹……」

そういえば、とうつすらと思い出す。

妹がいる。という事は何回か言っていた、しかし俺はあの時あまりその子と会わなかったのだ。

今思えば、小さな子がハナに付いてる時があったような……。

「それにしても、メルはよく覚えてたな。特に俺と何かあったわけでもないのに」

そう。俺自身覚えてないのだ。それほど絡んでいない相手を、ただ見ていただけとはいえ覚えているのは中々だ。

「私はお姉ちゃんから話を聞いてましたからね。いつも楽しそうに話してましたよ」

懐かしむような表情。まるで、その頃を思い出しているようで。

「いつかは話そう、話そうって思ってたんですけど……私、人見知りしちゃうから……」

ああ。つまりこつちが本当のメル、なのか。

馴染んだ相手にはあのように笑顔を見せたり、多少なりとも興奮した時は表情が表に出てしまうタイプなんだろう。

「立ち話もなんですし、座って待っててください。飲み物持ってきてますね」

そう言いメルは部屋の奥の方へと行ってしまおう。俺は勧められたように椅子に座り、特にすることがないので、部屋を改めて見渡していた。

……本当に変わらない。あの頃に戻ったような感覚だ。

「……ん？」

ある物を見つけてついそちらの方へ歩く。

壁にかけてあるペンダント。見間違える筈もない、この村を離れる時にハナに渡したお守りだった。

「——そのお守り、アキトさんからの物なんですよね」

手に取り眺めていると、飲み物を机に置いたメルが近くに來ていた。

「ずっと大切にしていましたよ。『アキトくんから貰ったんだ』って」

「そう、か」

大切にしてもらってた。それを聞くだけで胸が温かくなる感じがした。

「ああ、ごめんな勝手に」

「いえ別に気にしてませんよ」

再び俺は席に着く。互いに向かい合うように座った俺達は、さっそく本題に入った。

「それでだけど、なんで俺が指導係に？」

「村長さんが言うに『アキトさんが一番信頼出来る』からだそうです」

「信頼、かぁ……」

他の村のハンターを差し置いてまで俺に頼むか？ 昔からそうだ

が、あの人が考えることは分からないな……。

「お姉ちゃんと言を並べていたアキトさんなら私も信用出来ます」

「そう言って貰えるのは嬉しいが……。話は少し変わるけど、どうしてメルはハンターに？」

ピクツ、と反応する。

そもそも俺はメルがハンターになる理由が分からない。失礼な言い方になるが、ハナ姉が死んだんだ、むしろこの職から遠ざかりたいとは思わないのだろうか？

「わ、私は——」

必死に、何かに縋るように。

「私は強くならないといけないんです！」

メルはそう言った。声を上げた瞬間しまった、と思っただのかハツとするが、直ぐに大人しくなる。

その小さな身体のどこから、そんな大きな声が出るのか。と思えるほど大きな声だった。

暫く呆気にとられたが、俺は話を続けた。

「……強くなってどうするんだ？」

「強くなって、この村を守るようになりたいです。お姉ちゃんのように、私が」

「強くなりたい、ねえ」

嫌なくらいに固い意思を感じる。執着心とでも言うのか、でもそれはとても……。

俺は少し考え込み席を立つ。

「少し考える時間をくれ。明日またここに来るから」

「……はい」

消え入りそうな声で返事を背に、俺は家を出た。

思わずため息をついてしまう。

『私は強くならないといけないんです！』

決意の籠った言葉なのは分かる。そしてそれに対する覚悟を持つてるのも。そうでもない、実際に狩りに行くことなんてないだろう。

だが危険すぎる。言っ飛ばせばあやふやなままハンターをしている。村長が考えもなしに今回のような事を頼んだりするとは思えないが、その意図が汲み取れない。

「思った以上に厄介だぞ……これは……」

四話 条件と

メルと話した後、俺は村長に用意してもらった家で一晚過ごした。身体的な疲れはユクモ村の名物である温泉やゆつくりと寝れた事で回復した。しかし頭の中は村長からの依頼に悩まされていた。

『私は強くないといけないんです!』

『強くなって、この村を守れるようになりたいです。お姉ちゃんのように、私が』

メルあの言葉が頭から離れない。

いつからそう思って生きてきたのだろうか。……いや、いつからとというのは野暮か。恐らくそれは――。

「……行くか」

一晚悩まされた結果ある提案をした俺は、それを伝えるべくメルの家へ向かう事にする。

家を出てメルの所へ向かっていると、村を見て回っていたのだろう村長とばったりと会った。

「おはようございます、アキトさん。昨夜はよく寝れましたか?」

「おはようございます村長。……ええ、よく寝れましたよ。まあ考える事はありませんけど……」

村長はいつものように微笑む。別に昨日の事を話したというわけではないが、何故か昨日の出来事を見透かされてるような気がしてモヤモヤしてしまう。

「……………」

「……メルさんは」

ふと村長が口を開く。

「シルバースルを狩ることを目標としています」

「それは……っ」

言葉を飲み込む。

誰から見ても無謀。そもそも生きてる中でもう一度会えるかどうかも分からないのに、そんな大きすぎる目標を掲げるなんて。

「一つだけ教えてください。何で村長は、メルがハンターになるのを

許可したんですか」

「あの子がそれを望んだから、というのは駄目ですか？」

鋭く見つめられ俺は何も言えなくなった。村長も村長の考えがあるのだろうが、どうやら教えてくれないようだ。

「何も無い」のか「教えない」のか……。それともそれが本当の理由なのか、真実は村長だけが知る。

「暫く一緒に居てみてください。あの少女は貴方が思ってるほど、弱くはないのかもしれませんが」

「弱いだなんて……」

村長は「それに——」と付け加える。

「あのハナさんの妹です。何か起こしてくれるんじゃないんですか？」

村長と会話した後、俺はメルの家に着く。扉をノックし、家に居るのか確認をとった。

「メル居るか？」

それに反応するように家の中から足音が聞こえた。「はい！」と元気な声も聞こえ、中に居ることを決定づける。

「すいません待たせちゃって——あつ」

ドタドタと走ってきたのか少し息を上げてるメルが扉を開けた。だが、どこか気まずそうな表情をする。

「おはようございます……アキトさん」

「おう。おはようメル」

短く挨拶を交わす。

「えっと、中へ——」

「いや、いい」

「え？」

家の中へ招き入れようとしたメルの誘いを断る。

「狩りが出来る状態で村の入り口に来てくれ。アイテムは俺が持つてくるから大丈夫だ。もし武器と防具の手入れをしていないなら、それ

を済ませてから来てくれ」

「えっあの」

「どうした?」

「……いい、いえ、分かりました」

何かを言おうとしたメルは言葉を飲み込むように扉を閉め、恐らく俺が言った準備に取り掛かる。

俺は俺でこれからする事に必要なアイテムをある場所へ取りに行くことにする。

ハンターが交流、又はクエストを受けるために集う集会所。ユクモ村の集会所は他のところとは少し違い、名物である温泉が設備されており集会所浴場という名でハンター達の耳に広まっている。

クエスト前に身体をリラクサさせたり、クエスト後には汗を流すために湯に浸かりつつも裸の付き合いで親交を深めたり、とユクモのハンターだけでなく外のハンターもお気に入り場所となっている。

俺は集会所に入るや否や真っ直ぐに受付へ向かう。そこにはそれぞれピンクと水色の東洋風の衣装を纏った女性が二人いた。

「コノハさん、ササユさんお久しぶりです」

「あゝ! ひよっとしてアキトさんですか!? うわーお久しぶりです!」

「お久しぶりですアキトさん。お変わりないようで」

明るく元気、お淑やかで落ち着いてる様子と真逆の反応をする。

「ゆっくり話したいんですがすいません、少しお願いがあるんですけど」

「はいはい! なんてでしょうか!」

グイッ、と身を乗り出すコノハさん。……変わらないなあ、と思いつつ俺は要求をする。

「応急薬と携帯食料、それと携帯砥石を支給分貰えますか?」

集会所を後にし俺は村の入り口に向かう。荷物を持ち階段を降りていると、既に入り口付近に立っているメルの姿が見えた。

初めて会った時と同じようにレッドウィングを背負い、防具はユクモ村のハンターなら一度は着る（と聞いた）ユクモノシリーズを纏っている。

「つと、ごめんな遅くなつて」

「いえ、さつき来たところですから。……それでどうして急に狩りの準備を？」

俺が何も言わずに準備を求めたせい、メルは不思議そうに聞いてくる。

「一度しつかりとメルの狩りを見てみようと思つてな。元を知らないことには教えるのも無理だし、何より……」

「？」

ハナの妹、という言葉を発しそうになり話を止める。

「……いや何でもない。取り敢えず俺が指定したモンスターを狩つてもらおう」

「試験、みたいなものですか？ 分かりました。それでそのモンスターは……」

俺の指導を受けるための試験と受け取つたらしいメルは、その対象のモンスターを聞いてくる。

試験という言葉を使ったのは気を引き締めるためだろうか、と静かな顔を見てつい深読みしてしまう。

「モンスターはドスジャギィ。それを限られたアイテムで討伐してもらおう」

五話 戦闘 くドスジャギイ く 【前編】

「応急薬三個、携帯食料二個、携帯砥石が——」

村を出たところにあるベースキャンプにて、メルは俺が先程渡したアイテムを確認していた。一つ一つ確認しつつ、ポーチへ入れていく。

「——うん。準備出来ました、いつでも行けます」

「よし、それじゃあ行くぞ」

小さくメルは頷く。それを合図に俺達は溪流へと足を踏み入れたのだった。

——その頃ユクモ村では。

「はあつ、はあつ……！……！……！ ね、姉ちゃん！」

「朝からうるさいなあ、何かあったの？」

「め、メルが知らない奴と、変な男と一緒に居ただけど!？」

「ああー？ ……それ多分アキトだよ」

指をクルクルと回しながら女性は答える。扉を勢いよく開けた少年は息を切らしつつ「アキト……？」と言う。

「あんたはまあ小さかったからあまり覚えてないか。気にしないでいいよ、そいつ良い人だから」

そう言い女性は武器の手入れを続ける。

「で、でも……！」

「うるさいなあ。ボクが気にしなくていいって言ったの、聞こえなかったか？」

「うぐ」

女性の圧に気圧された少年は、口を閉じ自室へと戻る。少年が去った後で女性はポツリと呟いた。

「本当に戻ってきたんだ、アキト……」

溪流を歩く事数分、メルはジャギイの群れを見つけた。

「さて、どうする」

ジャギノスを筆頭とするその群れはそれぞれが肉を啜え何処かに向かおうとしていた。何処か、というのは恐らくというか確実に巢だろう。

ハンターは己がそれぞれの狩り方を有している。

例えば今のように小型モンスターを見つけた場合、後の障害となるようであればその場で殲滅するか。それとも流しておいて目的の足取りを掴んだり、別のモンスターを駆除してもらうか……その他にも色々あるが、ハンターによって様々だ。

「……………」

メルは武器であるレッドウィングを構え、腰を落とし前傾姿勢をとる。そして――。

「っ……………」

群れに向かつて突撃した。

不意打ち気味の攻撃、だがそんなのモンスターの前ではある程度意味を成さないだろう。自分^{人間}らよりも過酷な自然の中で生きている彼らは、人よりも全ての感覚において発達している。

千里先まで見通すかのような視覚。小さな音でも聞き取る聴覚。獲物を逃がさない嗅覚。

己の敵、ありとあらゆる気配を察知する為にその身体は出来上がっている。

無論、それは今回でも言えることだ。己を討とうとする気配をメルが踏み出した瞬間に察したのだろうジャギノスは、すぐさま啜えている肉を離す。それだけで事を察したジャギイ達は、散開しメルを囲むように移動を続ける。

「う」

先手を取り損ねたメルは一瞬にして不利な状況へ追いやられる。睨み合いをするように対峙するメルとジャギイは、その群れのリーダー格であるジャギノスの咆哮を合図に動いた。

「っ、ああー」

目の前にいたジャギイにレッドウイングを斬り下ろし、そのままから空きの後ろをカバーするために無造作に横へ薙ぎ払う。運良く後ろから迫っていたジャギイに薙ぎ払いが当たるが、他のジャギイは捌くことが出来ず――。

「つう……い」

身体全身を使った突進の餌食になってしまう。

攻撃の隙が大きい大剣にとってジャギイの様な素早さ、数が売りのモンスターは正面から相手にするのは分が悪い。それは今ので分かる。

メルはぐらり、と体勢を崩す。その隙を六匹のジャギイは逃すことなく攻め立てる。

大剣でガードしたり、回避はするものの全てを捌くことは出来ない。メルの体力は確実に、少しずつ削られていく。

「……はあ、っ」

統一されたジャギイの動きは下手な大型モンスターよりも面倒くさい。素早い動き、連携された攻撃、こちらが回復する暇を与えないやらしさを兼ね備えてる。

メルはポーチに手を伸ばそうとしているが、タイミングが掴めずに応急薬を取り出すに取り出せないのだろう。

回復するのを諦めたのか、ため息混じりに息を吐き出し呼吸を整える。

「そ……っ」

リラックスした状態からの一閃。既に傷を負っていたジャギイに攻撃は当たり、一匹目が沈む。

仲間がやられた事に怯むことなくジャギイ達は再び攻める。

「つう――ああああっ!!!」

アオアシラ戦で見せた相手の攻撃を受け流すかのような動き。攻撃は避けたもののメルは体勢崩れてしまう。しかし「そんな事知ったことか」と言うように声を上げ、大剣を無理矢理に振るった。

メルは背から地面に倒れ込むが、その攻撃は攻めてきていた二匹のジャギイを巻き込むことに成功していた。

「残りは——アっ!？」

剣を突き刺し立とうとするタイミングで、指示を出していたジャギノスが死角から体当たりを仕掛けてきた。もろに喰らったメルはその体格の差から大きく吹き飛ばされる。

リーダー格が減った数を埋めるようにして入り、ジャギイ達の動きがジャギノスをカバーするような動きに変化したのが分かる。

「ふっ……はっ、あ……」

ゆつくりと立ち上がりハンターナイフを構える。ジャギノスの攻撃指示の合図である咆哮と同時にメルは、地面に突き刺さったままのレッドウイング目掛けて駆け出した。

迫り来るジャギイを潜り抜け、武器を取らせまいと立ちほだかるジャギノスと向かい合う。尻尾を横に薙ぎ払うも、メルは間一髪でしゃがみ回避する。そのままバネのように身体を伸ばし、ハンターナイフをジャギノスの顔に突き立てた。

「グアアアウ——!？」

入りが浅かったのか、怯んだ時に顔を左右に振りハンターナイフが抜け落ちる。しかし、その僅かな時間でもメルが武器を手取るのは十分だった。

「沈んで——っ!」

背後から溜め斬りをジャギノスにお見舞いする。限界まで溜めてたわけではないが、相手を地に伏させるには十分な一撃だった。

「はあ、はあ……っ!」

リーダーが沈んだくらいで大人しくなるジャギイではない。大攻撃後の隙を見せたメル目掛け、尻尾を素早く払う。それをしっかりと見ていたメルはレッドウイングの面を向けガードを取った。

そのまま面で一匹を吹き飛ばし、ジャンプしてきていた一匹をタイミングを合わせて斬り落した。

司令塔を落したメルは一気にペースを取り戻し、そこからジャギイの群れを殲滅するのはさほど時間がかからなかった。

戦闘後、落ちたハンターナイフを拾い応急薬を口にする。携帯砥石でレッドウィングを研いでいるメルは近くに俺は寄った。

「どう……でしたか？」

顔を伏せたまま聞いてくる。研いでいるから伏せてるのは当然なのだが、それ以外にも何かあるように思えてしまう。

「どう、と言われても。まだ親玉を倒してないから——」

「そうですね……あ」

レッドウィングを背負いメルは足を次のエリアへ向ける。だが、メルの進行方向には大きな——今回の討伐対象が姿を現した。

「お出ましたな」

「……………」

背負ったばかりのレッドウィングに手をかけ、メルは討伐対象と対面したのだった。

六話 戦闘くドスジャギイく 【中編】

メルはレッドウィングに手をかけたままドスジャギイへと駆ける。真正面から来た相手を、ドスジャギイはその巨体に似合わない軽やかなステップで躲した。

対面した時よりも距離を取られメルは再び距離を詰めるべく地面を蹴る。ドスジャギイはその間にエリア全体に響き渡る咆哮を上げた。

「ふっ！」

追いついたメルはすぐさまレッドウィングを横に薙ぎ払い、ドスジャギイにダメージを与える。

「遅かったか」

攻撃を与えたにも関わらず、こちらから見えるメルの顔は険しく歪んでいた。本人も気付いているのだろう、今の行動を阻止出来なかった重大さに。

ドスジャギイは敵と交戦する際、咆哮を発する。それは相手への威嚇と共に「自分がここにいる」という事を配下へ知らせる合図でもある。

ハンターが複数人いればそうでもないが、メル一人の現在はただでさえ厄介なドスジャギイに加え、ジャギイノス、ジャギイが加わり乱戦となると苦しい事この上ない。

メルは顔を歪ませながらも攻撃を与え続ける。――が、先程の疲労も重なってるのだろう、動きが大振りなのが目に見えて分かった。しかしその大振りと言えど効果は出ていた。

自分一人の乱戦下において、大剣の振り回しは自分の周囲を攻撃、カバーするにはもってこいだ。現にそれは、メルの周りに群がるジャギイ達を巻き込むことに成功していた。

――が。数と力で押し切るこのモンスター達には、差程苦ではないようにで……。

「ぐ——うううっ！」

ガードをするメルに入れ替わる様にタックルをし続けるジャギイ

達。そこに背後からドスジャギイの攻撃が迫る。

気配を察知したのか、間一髪のところ、尻尾の薙ぎ払いをしゃがんで過ごす。そして再びレッドウイングを振り回す。

相手にとって見飽きた行動だろう。己の脚を魅せるような跳躍で軽々しく躲し、ガラ空きのメルに急襲のような形で爪で切り裂く。

「いつ……！」

身に纏うユクモドウギが引き裂かれ、そのまま肌まで爪が届いた。傷口から血が流れ、メルの顔が苦痛に歪む。

血の匂いのせいか、ジャギイ達の動きが活発になり、獲物を確保するべく思い思いに攻撃をする。

ドスジャギイ、ジャギノスも指示を出すだけでなく前衛にてメルを攻撃し続けていた。

防戦一方、まさにその通りな状態のメルはおもむろにポーチに手を伸ばす。

壁際に追い詰められる中、メルは勢いよくポーチから手を引き取り出した物を地面に叩き付けた。

眩い光が視界を奪う。

「——そこを、退いてっ——」

閃光玉が発する光の中、メルはエリアを移動した。一度ベースキャンプに戻ってきたメルに、俺は少し気になる事があった。それは——

「少し見せてみろ」

「え、アキトさ——っ……ん……！！」

「……やっぱりか」

先程ジャギイに切り裂かれた部分を見る。防具が防具だけに傷口が深かったのだ。

エリアを移動する際に裂かれた部分のドウギを引きちぎり簡易的な措置をしていると思ったら、こういう事だ。

痛みを堪えてるのかメルの目に涙がうつすらと浮かんでいる。

「でもこれくらいどうって事ないです。少し休めばまだやれます」
「……………」

自分で出した条件、これをここで切ると自分勝手にも程があるだろう。だが大怪我を負う前に止めさせるべきか…………。

思考する中、メルは二個目の応急薬を飲み干し俺をしつかりと見据え、こう言った。

「私を、甘く見ないでください。私だってハンターなんです。ここからドスジャギイを倒す方法だって考えてます。だから…………アキトさんは黙って見ててください」

言うだけ言ってメルはコロンとベースキャンプに置いてある寝床で横になった。

「私を甘く見ないでください、ね」

その瞳に見つめられながら言われると、記憶と変に重なってしまふ。

ふと視線を下ろすと既にメルは寝息を立てていた。

「(寝顔もハナと一緒になんだよな)」

あいつの妹なんだと実感してしまう。

その実感はメルに対する隠れてた思いも気付かせてくれる。

ああ、俺はこいつに期待してるのか。

今ので垣間見えた、ハンターとして必ずと言っていいほど必要な折れない心。どんなに体を鍛えても、どんなに強い武器を持とうとも、最後に辿り着くのは心。そこがしっかりとしてないと、ハンターというのはいっしか崩れ去ってゆく。

だが、この少女はそれを幼いながらも持っている。

「(どうか見せてくれ。そして応えてくれこの期待に…………)」

七話 戦闘くドスジャギイく 【後編】

ベースキャンプにて暫く休んだメルは各エリアを周りある事をした後にドスジャギイ達が集まるエリア4へと戻ってきた。

「ドスジャギイは居るな。……メル怪我は——」

「む……」

怪我した箇所を見下ろす。メルはそれが気に食わなかったようで、ムツとして言う。

「子供扱いしないでください。怪我は大丈夫ですから。……行きま

すっ」
布を雑に巻き付けた部分を手で覆い隠し、隠れていた草むらから飛び出す。

『私を、甘く見ないでください。私だってハンターなんです。ここからドスジャギイを倒す方法だって考えてます。だから……アキトさんは黙って見ててください』

両手に持っている玉を見ながらベースキャンプでの言葉を思い出

す。
確かに、その発想が出てくる事は予想してなかった。予想してなかったというより俺はその発想が出てこなかった、が正しいだろう。
「っ！」

大きく振りかぶり左右にその玉を投げる。その玉はジャギイ達の間に転がり込みながら、衝撃によって崩れた隙間から白い煙が溢れ出す。やがてその煙はエリアの半分以上に広がりこちらからはメル達の姿が見えなくなった。

「(一匹……!）」

立ち止まることなく私は煙の中を縦横無尽に駆け巡る。手当り次第、見つけた相手から斬り伏せる。

自分のスタミナと私の策であるけむり玉の作用時間との戦い。ここである程度数を減らさないと、私の敗北は決まってるようなもの

だ。

だから――。

二匹目のジャギイを斬り抜け、ステップを返して往復にもう一度剣を振るう。止まることなく煙の奥に見える影に向かい駆け、斬り上げ――そして振り下ろす。

「はっ……はあ……っ！」

疲労している身体に鞭を打つように自分自身を奮い立たせ足を動かす。

が、そう上手くいくものではない。

ドスジャギイ達は仲間が倒れたことを察し声を掛け合い、連携し、目標を定める。こちらの血の匂いは覚えられているだろうから、この煙の中でも気付かれるのは差程時間は必要としないだろう。そういった点では圧倒的にモンスターが有利な状況だ。

自分の策で自分を苦しめる。というのはハンターでもよくあること……っってお姉ちゃんがいつか言っていた気がする。

……お姉ちゃんが特別ドジだっただけかもだけど。

「――！」

思考していると煙の中を一直線に巨大な影が突き抜けてきて、メル目掛けそのままタツクルをしてきた。それをレッドウイングの面で身体を覆うようにガードをするが、急な攻撃もあつて吹き飛ばされてしまう。

「っあ……っ！」

足元がふらつく。顔を上げると、目の前には堂々と佇むドスジャギイの姿があつた。

幸いにもジャギイ達はまだ私を見つけてないようで、今現在一対一の状況。一分続くか続かないか、そんな見合いの中で私は勝負に出る。

「(このチャンス、物にする――っ！)」

レッドウイングを強く握りドスジャギイに攻撃する。

溜め斬りをする時間も隙もない今は敵の攻撃をいかに近距離で避けて、がら空きの背中に攻撃を入れられるか――。

「そ、こ……！」

噛み付きを身体を捻り最小限の動きで攻撃を避け、剣を振り下ろす。怯みながらも立て続けに來た尻尾の薙ぎ払いは、腰を落としてドスジャギイの薙ぎ払う逆の方向に走り回避。そして攻撃。

「完全に怯んだ！ 今なら——」

一瞬の隙を逃さないように一撃を溜める。その一撃を——。

「つう——あああああッ!!!」

ドスジャギイの身体に叩き降ろした。

その一撃により尻尾が切れて、ドスジャギイは更に動きが止まる。

「(まだ……っ)」

横に薙ぎ払いつつも距離を調節し、もう一度溜め斬りをお見舞する——が。

「うあっ!？」

背後から私の位置を特定したジャギイ達が集まってきた。

ジャギイのタツクルにより溜め斬りが中断され、その間にドスジャギイは逃げようとした。しかしその逃げる姿は足を引き摺っており、この勝負も終わりが見えてきた感じがする。

「逃がさない、こっこで——!」

振り向かずただ前に走る。

斬り抜けると共にドスジャギイはその巨体を崩し、地に倒れ込む。

これが最後のチャンス。私は溜め斬りのモーションに入り、そして……。

「倒れてっ!!!」

レッドウィングをドスジャギイに振り下ろした。

「はあ、はあ……」

「お疲れ様。よく頑張ったな」

残ったジャギイ、ジャギイノスを倒した俺は疲れきったメルの上に歩く。それに気付いたメルは、息を切らしながらもこちらを見て何故か表情を緩めた。

「ど、どうですかアキトさん。私ちゃんと倒せましたよ……」

「所々危なかったがな。まあ取り敢えず村に戻るぞ。メルも疲れてるだろうし……立てるか？ 無理そうだったら……」

「だ、だから子供扱いはやめてください。私は大人なんですよ……！」
軽い気遣いのつもりだったのだが、メルはそれが気に入らなかつたらしくフラフラの状態で何とか立ち上がった。そして村の方へそのまま歩く。

俺はその背中を見ながらメルのあとを追いかけるように村に戻ったのだった。

八話 温泉にて

「それじゃあまた、だな。程よく時間潰したらメルの家に行くから」
「分かりました。また後ですアキトさん」

ユクモ村に戻って来た俺達は後で会う約束をし別れた。
とてとてと集会所の方へと走っていくメルの背中を見ながら、何となく思う。

先程の狩りを見ていて第一に思ったのは危ないという事だ。メルにもそれはボソリと言ったが、恐らく本人は分かっただろう。

あのモンスターの攻撃を寸前で避けるような動き、良く言えばモンスターへの動きをしっかりと見ているという事だが悪く言えば、集中力が途切れた瞬間にそのスタイルは崩れ去るという事。

それにこう言うともまた子供扱いと言われるんだろうが、あの小さな身体でモンスターへの攻撃をモロに受けるのはハンター人生——下手すればメルそのものの人生に大きな障害を生むことにも繋がる。そういう点では村長にハンターを辞めさせるように相談するべきなのだ……。

「はあ。難しいな」

「——そうだねえ。ボクもそう思うよ」

「そうだよ——は？」

誰に向けた訳でもない言葉を拾われて変に反応してしまう。声の方を振り向くと野菜や果物、様々の物に乗せたカゴを持っている女性が立っていた。

「やあアキト、久しぶりだね。」

「……久しぶりだなアーシャ。元気そうでなによりだよ」

昔とあまり変わらない声。ショートカットで白髪の綺麗な髪。そして女性としては独特な「ボク」という一人称。

俺が過去にユクモ村に滞在していた時、よく絡んでいたハンターの一人であるアーシャがそこには居た。

「それで……何を悩んでいたのかな？ ボクでよければ話を聞くよ」

「いや、アーシャが気にするような事じゃないから別に——」

流石にこれは俺の……というか俺達^{俺とメル}二人の問題だ。関係ない人物を巻き込む訳にはいかない。

「気にするよ。だってメルちゃんは、ボクの妹みたいなものだからね」内容をはぐらかそうとしたがそれは意味がなかったようだ。というか、どこか知ったような口で言うアーシヤに疑問を覚えた。

「……分かってたのか」

「そりゃあね。……ちよつと外じゃ話しづらいな、一度ボクの家に行こうか。色々話したいこともあるしね」

そう言いアーシヤはカゴを俺に渡し、俺の前を歩く。

懐かしい感じを胸にアーシヤの後ろを着いて行ったのだった。

「ふわああああ……」

腕と脚を伸ばしくつろぐ。傷に湯が染みるが不思議と痛みは悪化せず、それどころか痛みが引いていく感じがする。

それが今私が浸かっている集会浴場の温泉だ。

クエスト後のハンターは皆この浴場にて汗を流している。ユクモ村が他の地域より勝っているだけはあると思う。

今居るハンターは私だけ。この浴場を独占なんて贅沢すぎる事だ。なので普段は遠慮して出来ない贅沢なくつろぎ方でもしよう。

「ふわ……」

両手両足を広げ、大の字でぶかぶかと湯船に浮く。

お姉ちゃんがたまにしていたこの遊び、本当はダメなんだけど……たまにはいいよね？

息を吐きながらリラックスする。

聞こえるのはお湯の流れてくる音と、誰かが湯船に入ってくるような音——。

「何してんだよ、メル……」

男の子の声が頭の方から聞こえ、視線を上に向ける。そこにはタオルを腰に巻いた見知った男の子が呆れたような表情でこちらを見下ろしていた。

「あ、あはは……。ユリンくんこんにちは……」

「ハナさんみたいな事してんだな」

その男の子の名前はユリン。

この村のハンターであるアーシャさんの弟で、私と同じ年のハンターだ。

そう言いながら椅子に座り身体を流し始める。私はというと普通に湯船に浸かり直し、何も無かったように振る舞い始めた。

「そ、そう？　普通だよ？」

その後、ユリンくんがボソリと何か呟くが背中を流したお湯の音により掻き消され聞こえることはなかった。

「ふーん。ところでさ」

何気なく、といった風に話を振られる。

「今日狩りに行ってただろ。それでえっと、あの男の人って——」

男の——といったら今日私と行動していた男性は一人しかない。

「アキトさん、だよ。お姉ちゃんと仲の良かった」

「やっぱりか……」

「やっぱり」と言うのは隣に居たのがアキトさんだと知っていた口振りだ。

「見てたんなら声かけてくれればよかったのに」

「……………声掛けようと思ってたよ」

身体を洗い終えたユリンくんが私の斜め前に浸かる。

「変なの」

「言ってる」

軽く流され「うん、言ってる」と一人呟く。

暫く無言が続いたが、ユリンくんから口を開いた。

「狩りの結果はどうだったんだ？」

「ドスジャギイを討伐したよ。限られたアイテムで行う試験だったんだ」

「ふーん」

……………なんだろう。いつもより冷たい感じがする。何か嫌なことでもあったのだろうか。

私はユリンくんの横にゆっくりと近付き、逆に質問をする。

「お、おま……っ」

「ねえねえ、ユリンくんは？ ユリンくんは今日何してたの？」

「~~~~っ」

顔を覗きながら聞くと何故か目を逸らされる。そのまま立ち上がり足早に温泉を出た。

「お、俺！ 先にかかるから！ それと今日は姉ちゃんの手伝いしてた！」

滑りそうになりながらも更衣室の方へ行くユリンくんを見ながら、やっぱり私はこう思った。

「……変なの」

九話 旧友

「——ふーん。それでユクモに戻ってきたんだね」

「まあそういう事だ」

「それは何と言うか……ねえ？」

何か言いたげに、でも言わなくても……という風に見られる。

「君だから頼んだんだろうね、村長は。ハナさんのパートナーだった君に」

「皮肉にもな」

村でアーシャと再開した俺は、気を利かせて話す場所を設けてくれたアーシャの家へと向かった。そこで再び俺がここに来た理由を話していた。

それとメル的事も……。

「銀火竜……メルちゃんはその目を目の敵にしてるのは知ってるね？」

「ああ。それに、その覚悟が本気だという事も」

村長からの話を思い出す。

「ありもしない事を聞くけど君、銀火竜に遭遇した事は？」

「ある訳ないだろ。幻の存在だと思ってたんだぞ」

古龍の様に伝承によって伝えられる希少種。たまに見た事があると言うハンターもいるが、それが嘘か本当か分からない。

実際に遭遇したハンターで討伐は出来なくとも、その素材の一部を持ち帰るだけでも相当な功績と称えられる。それだけその呼称のよさに希少で幻の存在だ。

「言っちゃ悪いけど、それをあんなハンターのヒョっ子が、ね」

「確かに無謀にも程があるな」

アーシャは机をコンコンと指で叩きながら話を続ける。

「そして君はその無謀を叶えに来た」

「叶え……れるかはどうか。上位のハンターになるまでしっかり面倒は見るさ。それ以降は……まあ、その時村長に聞いてみるよ」

肩を竦めながら答える。

その復讐と言うべきだろう、それを成し遂げられる力をメルに付けさ

せる事が出来るのか。それこそ無謀とも言えるが……。

「——ま、重い話はこれくらいにしようか。久々の再開なんだし今までの事、聞かせてよ」

今までとは一転、目を輝かせて物語を聞きたがるような子供の様に顔を近付けてくる。

アーシヤの言う「今までの事」というのは大抵俺がこれまで行ってきた狩りについてだ。主にユクモ村周辺に存在しないモンスターとの狩りについて、こいつは聞きたがる。

「そうだな……」

俺は今まで狩ったモンスターをまとめたノートを開きアーシヤへ手渡す。

「どれか聞きたいのあるなら教えてくれ」

「おっけー！ ……ふんふん、えーつとねえ——」

「——やっぱり君の話は面白いなあ」

「そう言ってもらえると何よりだ。……さて、そろそろ俺は温泉行くよ。アーシヤは？」

「ん、そうだねボクも行くとしようかな。それとユリンも戻ってくるだろうし……」

「ユリン……ああ弟か。元気にしてるのか？」

「元気だよ。まあ最近は少し大変だけどね」

苦笑いしつつアーシヤは答える。

大変、の部分はまあ思う所があるのだろう。確かアーシヤの弟はメルと同じ年になる筈だ。……何歳だったかは覚えてないが。

ほんとここに来て懐かしい事ばかりだ。メルと違ってユリンとはよく遊んでいた記憶がある。昔の記憶で言うのなら、少しやんちゃな男の子といったところだろう。

「取り敢えず行こつ——」

と、アーシヤが家を出ようとしたその時だった。

「姉ちゃん！ アキトさんは!?!」

大きな声と共に息を切らしながら、一人の少年が家の中に来た。その少年はアーシャに似て白髪なのが見て取れた。

あいつが成長したらこんな感じなんだろうな、という過去に抱いたイメージ通りの姿。この少年が恐らく……。

「あれユリン。早かったねどうしたの？　というかアキト？」

予想的中、この少年こそユリン。アーシャの弟だ。

家に入るや否やユリンは俺の名前を呼んでいた。アーシャは不思議そうに俺の方を見るがそれはこちらも同じ。お互い状況が呑み込めないまま視線を交わし、ただ一人理由を知るユリンが俺の前まで来て話しかけてきた。

いや、話しかけてきたというよりも――。

「アキトさん……俺を、俺を強くしてください！　お願いします！」
頭を深く下げ、そう懇願してきたのだった。

十話 二人での狩猟

「ユリンちゃんと狩りに行くの久しぶりだね。足引っ張っぱらないようにしなくちゃ……!」

「……あんまり気張りすぎんなよ。それで失敗でもしたら元も子もないからな」

キャンプにてアイテムを整えながら話すメルとユリン。そんな二人の姿を俺達は後ろから見守っていた。

「ユリンは太刀か」

「そうだよ。ボクと同じ」

ユリンの装備は防具がジャギイシリーズに武器は太刀である凍刃を背負っている。

「うーん、それにしてもあの二人で狩りかあ」

「? 何かまずい事でもあるのか?」

「いやあ、そういう訳じゃないけどさ」

やや心配そうな表情を表に出すアーシヤ。クエスト前は「誰の弟だと思ってるの? ボクの弟だよ。実力はそこそこあるって」など自信はあるようだったが。

「んー、メルちゃんの狩り方的にね。まあ見てれば言いたい事伝わかな」

「? なんだそれ」

確かにメルの狩猟スタイルは独特だ。しかしそれが何か影響を及ぼすだろうか。前にアオアシラを討伐した時は違和感を感じなかったが……。

「準備完了! 行こっかユリンくん!」

「あ……おい、メル! 一人で突っ走るなって!」

……なんというか、振り回されてるなエリン。メルもどことなくテンションが高い気もするが。

「(取り敢えずお手並み拝見か)」

元氣いっぱいなメルと落ち着きのあるエリン、真逆に位置する感情の二人の後を俺達は着いて行った。

今回狩るモンスターは孤島にいるルドロスの群れ。村の漁師からの依頼が来ていて、どうやら群れのせいで漁に出れないのだとか……。

なので今回はその依頼を二人に任せてみたわけだ。

「おじさんも言ってたけど確かにロアルドロスは居ないみたいだね。ルドロス達が指示を受けてここに居るだけかな」

「みたいだな」

俺とアーシャは前回の俺同様少し離れた場所で様子を見ている。幸いにもルドロス達のボスであるロアルドロスは前に出てきていないようだ。

二人はルドロス達が道を封鎖してるというエリア9に向かって歩く。そしてそのエリア9の手前、エリア5にて目標を捉えた。

丁度エリアの境目ら辺でも既にその群れは確認できた。

メルは脳無しに突っ込みそうだが……ユリン、お前は どうする？

エリア9に入る直前で俺達はルドロスの群れを確認する。視認できる範囲で……8匹か。取り敢えず閃光玉で目眩しをして、それから――。

「先行するよー！」

「は？ おいつ！ 待ってっ！」

おもむろに武器を構えたかと思うと急に群れ目掛けて走り出すメル。俺は取り出そうとしていた閃光玉をポーチに戻しメルの後を追った。

「考えも無しに突っ込むな！」

「だいじょーぶ！ 私とユリンくんが片っ端から倒していく！」

「それは考えじゃないだろ!？」

レッドウィングを斬り上げ、そのままその刀身を振り下ろす。がら空きの側方からルドロスはメルに向かい噛み付こうとするが、相変わ

らずと言うべきかギリギリまで攻撃を引き付けてから寸前で回避をする。

「ほんと見てて危なっかしい……!」

そんなメルを横目に俺は凍刃を振るう。振り下ろし、突き、そしてルドロスの側方に回り込むように薙ぎ払いながら位置を調節する。

「グ、ウ……。グルウア……」

確実に一匹ずつ狩る。落ち着いて、小型とはいえ面倒な相手には変わりない。

「次は——」

次の標的を定めようと視線を動かすと俺の視界にルドロスではない何かが入り込んだ。そしてそれはそのまま俺の方に近付いてきて……。

「え、ユリンく——」

「——は？」

ドサツ、と俺とメルは倒れ込んだのだった。

何故か倒れ込んだ二人を見て俺はこの狩猟が始まる前にアーシャが言っていた事が分かったような気がした。

「ああ……。こういう……」

「そーなんだよねえ」

思わず頭を抱えてしまう。

アーシャが心配していたのはこれだろう。

メルの回避の仕方、それにより発生する他のハンターとの接触。

「ボクもたまにメルちゃんと狩りに出るけど未だにあの回避には慣れないんだよねえ。自分の周囲、それも回避に必要なスペース分だけしか見ずに移動してるからあの方法で避け続けるといつかぶつかったりするんだよねー」

二人は言い合いながらも体勢を立て直して狩りを再開している。

「そりゃそうだろ」

お互いに距離を取りつつルドロスを狩る二人を眺めながら呟く。

「ユリンは行動を組み立てて動こうとするけど、メルが戦況を荒らし
ている。……荒らしているというか大剣なのに縦横無尽に駆け回
るから掴みにくいのか」

「その結果ああいう事がねえ。因みにだけど前にも一回あったよ」

「というか何処であんな回避の仕方を覚えたんだ？ 誰かが教えた
とした思えないが……。」

「メル！ 近付いてるぞー！」

「ええっ!? ご、ごめんユリンくん！」

「どうやらユリンが近くに来たメルに声を発し位置を教えるという
方法で落ち着いたらしい。」

「(それでいいのかよ……)」

「いやー、やっぱり面白いねあの子ら」

「おもしろーはあ。大丈夫かあ？」

呑気に笑うアーシャを横に俺は頭を抱えてたのだった。